

「折鶴お千」と「唐人お吉」

佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長



「折鶴お千」は溝口健二監督の1935年の作品であるが、オリジナル版はサウンド版である。サウンド版とは、無声映画と同じようにセリフは字幕になっているが、音楽と説明が録音されているという変則的なもので、サイレントからトーキーへの過度期の産物である。日本で最初の成功したトーキーである「マダムと女房」がすでに1931年に発表されている。「折鶴お千」ははじめサイレントとして作られ、他の殆どどの映画がトーキーになっている状況ではサイレントでは商売にならないということで、途中でサウンド版に切り換えるという無理をしたらしい。今度のこのトーキング・サイレント版は、サウンド版に改めて弁士澤登翠による映画説明を加えたものである。

いわばこの映画は、サイレントでもトーキーでもない半端な形で世に出ていたものを、あらためて本来の弁士の説明付きのサイレントのかたちに戻すものとして、たいへん貴重で有意義な試みと言えよう。実際サイレントとトーキーでは表現の方法が基本的に違うので、それを商売の都合で途中で変更したサイレント版には奇妙な印象があって、巨匠の野心的な作品であるにもかかわらず、最初の公開当時に評判にならないまま忘れられてしまったのはまことに残念である。このトーキング・サイレント版で再評価されることを期待したい。

原作は「滝の白糸」と同じ泉鏡花であり、この作家ならではのじつに美しい詩的なセリフがいたるところに散りばめられている。そのセリフは七五調の韻をふんでいるので、文章として黙読するか曲をつけて詩として詠いあげればうっとりとできるが、普通に喋ると不自然になる。こういうセリフこそ、独特な調子で詩のように詠いあげることができる弁士の説明の聞かせどころなのである。サイレント映画でこそ可能だったこの語りの魅力を弁士の芸で堪能しようではないか。

1930年「唐人お吉」は当時ベストセラーだった十一谷義三郎の小説の映画化である。溝口健二が凝りに凝って、撮影の都合のために電信柱を切らせようとしたとかいうエピソードが伝説的に伝わっている。この作品の頃から溝口のリアリズムは徹底的なものになったと言われている。主演は梅村蓉子。溝口健二の初期の作品の最も重要なスターだった女優である。